

---

# 春の夢庭にて

藤月心晴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春の夢庭にて

### 【Zマーク】

Z5997Y

### 【作者名】

藤月心晴

### 【あらすじ】

夢守の獣、猿が迷い込んだのは常春の夢庭。そこには、らでんしたんごげんびわと名乗る女性でした。しばらく音を奏でていないと琵琶様はお嘆きになるのですが……

自ブログに掲載したものです

やや、やつがれとしたことが……。

いつの間にか、どなたかの夢世へ入り込んでしまったようです。迷い込むなんてふがいないやつがれを、ご主人はどう思われるでしょう。一刻も早く、ご主人のもとへお戻りせねば……。

とは申しますものの……。

なんて美味しそうな夢世でしょう。いえいえ、やつがればご主人の御許へ戻らねばなりません。うう、しかし、その、ちょっとぐらいならば、ご主人も……。

「あらあ、変わったお客様です」と

「ご主人と美味しそうな夢世がやつがれの天秤の上でぐらぐらしておつますと、どこからか声が聞こえました。なんとも麗しい、まるで琵琶のようなお声です。

一度で良いので、お顔をじ覽したい。その一心に負けて、あたりを見回しますと、ふと気がつきました。

「この夢世は、まるで春のようです。

桜、花海棠、花梨に山吹、蓮華や春紫苑が風にそよいであります。薄桜色の波があつと吹きますのは、一面の桜草なのです。あちらの黄色い波は菜の花でしょうか。空は薄青く、流れる雲は白いです。

「迷子なの？」

やつがれの背後で、優しい声が生じました。はっとして振り返ると、たおやかな女性が立つておりました。まるで蓮華と石榴と牡丹と忍冬を合わせたような女性です。

「あり珍しい。貌さんではありませんか

やや、やつがれをじ存じでじやいますか。

「すさんだ夢世をお掃除される噂は、私にも届いておりますの。あちらの、噂好きの小鳥たちがね、楽しそうにおしゃべりなすつて

女性がやうおひしゃると、『』からか可愛らしい小鳥が飛んで参ります。青い羽色は、つねに変わらぬ夢世の色ではありませんか。ご主人の夢と似ております。ああ、『』主人のもとへ、お戻りせねば。素適な夢主様、やつがれ、そろそろお暇いたします。

「あら、もう行つてしまつの？」

やつがれは、ご主人の夢世で遊ぶお約束をしておりますので。「やうなの。それは守らなければね。では、またいすれ『』はい。では、失礼します とやつがれは前足で夢地を蹴りました。後足でも蹴りました。

……あれ。あれ？

素適な女性が田を丸くして、やつがれを『』覧になります。やつがれはもう一度、前足と後足で夢地を蹴つてみました。ですが、どうしてもいつものようにはまいません。

まさか、まさかのまさかですか！

「どうなさいました」

帰れません。体が重たくって、帰れないのです『』ぞこます！ 田を『』らしてみると、やつがれの足に葦草がからみついております。桜草もさわさわと葉をのばしてきました。

どうやら、この春のよつな夢世にも凶夢が隠れているよつでした。ならば、このやつがれ、お役にたたねば猿としての矜持が保たれません。夢世のお方、お名前をうががつてもよろしいですか？

やつがれが問いますと、女性はほほと笑われました。腕に絡む薄布が春のあたたかな風に揺れております。

「らでんしたん『』げんびわと呼ばれております」

ほん、と軽やかな音で女性は名乗られました。その名は、いざこかで聞いた高貴な御名で『』ぞこました。

お名前が長いので、琵琶様と呼ばせていただくことになりました。琵琶様はずつといの春の夢世におられるそうで『』ぞこます。

「他の方もね、ときどきおこでになるのよ。お仲間で集まつて、昔語りをいたしますの」

女性方のお話とあれば、きっとながあくお話をされるのでしょうか。やつと、やつがれは途中で足がしづれてしまつてしまふ。

此処や哀し

此処や寂し

琵琶様のお話を聞いておりますと、「此処や哀し」と聞こえて参ります。やつがれと琵琶様のまわりを飛び交う、ちこちな小鳥の鳴き声でした。

夢小鳥さんたちは、なにを哀し寂しと仰るのでしよう。やつがれの隣をほろんほろんと歩かれる琵琶様からば、なにも感じられませんが……。

「こまえこいらした、平螺鈿背円鏡さんと金銀山水八卦背八角鏡さんがあちらにて素適な小池をお作りになつたのよ。ああ、思い出すわね。とても暑い夏の夜にね、釣殿で樂を差し上げたの。雪の朝には、白菊曲を奉じましたの。皇后様のお考えでしたわ」

ほろんほろんと、琵琶様が昔語りをなさるたびに、夢はくへるへると姿を変えてゆきます。池に張り出した涼しげな釣殿かと思えば、朝陽に照る雪の庭であつたり、紅葉深い築山であつたりと、まるで古い時代の王朝絵巻のようでした。

王朝。そう、王朝です。この日本國の歴史語りに出てくる、黒々と輝く甍がどこまでも続いていきます。よもやと琵琶様を見上げて、改めて気づきました。琵琶様のお姿は、すこし古風でござります。琵琶様のお姿は、都がまだ真都になるまえの時代でござるこまじゅう。琵琶様のお姿は、『主人のもとで拝見した絵姿にそっくりでございました。途端、ぽろん……と一際、高く音が鳴り響きました。まるで、やつがれの考えを読んだかのようです。

螺鈿紫檀五絃琵琶。

やつがれの頭の中に、ぽおんと文字が浮かんで参りました。それは、かつて主人がご覧になつていていた本に書かれていた名でござい

ます。

琵琶様、琵琶様は螺鈿紫檀五絃琵琶様でござりますね？

「あー、お気づきになられたの？ すうつかり忘れられているものだとばかり、思っていたのに」

忘れる？ なぜ、そう思われるのですか？ 琵琶様は国宝と崇められておりますのに。

「だつてね、摸さん。わたくしたちつて、ここ最近は倉に収められてばかりなんですもの。ちつとも、奏でてもやくれないの」

琵琶様のお顔がはたと曇りました。絹扇でもうやかな口元を隠されます。

いいえ、琵琶様。そのようなことは決してございません。

「摸さん。わたくしたちは物です。物は必要とされてこそ、存在するのです。それなのに、最近の主上ときたら、洋琴などとハイカラな物を大切にされてばかり！」

洋琴、でございますか？ それはいったい、どのようなお品でござこましょ。しかし、琵琶様はやつがれの疑問など置き去つて、とつとと“主上”への不平不満をぶちまけます。

「小提琴だの風琴だの短笛だと、異国の楽器に田移りされてばかり」

不思議な言葉がぽんぽんと調子よく琵琶様のお口から飛びだします。そのたびに、夢世には変わった姿の楽器たちがあふれ出ます。それを見て、また、琵琶様は頭を振られるのです。

「わたくしじもは、もう、お役ご免なのかしら……」

琵琶様がはたと歩みを止められます。いかがなさいました、琵琶様。麗しいお顔が曇つていらっしゃいます。

「もつ、ずっと倉に収められてばかり。わたくしは楽器なのですもの。奏でてもらわなければ、楽器ではありません」

なるほど、とやつがれの考えがまとまりました。この春のような夢世もまた、ひとつ凶夢でございましたか。物も魂魄が宿ると申しますが、まさか夢を見るものがあるとは存じませんでした。それ

も、凶夢を見るものとは、思ひも寄りません。やつがれも、琵琶様の音色を聴いてみたいのです。主上といつ方に、夢の中でもよいので

演奏いただいて……夢、そつ夢です。『』は夢世でござります。

琵琶様、夢を渡りましょ。主上の夢にお邪魔するのです。

「夢を渡るなど、できるのですか？ わたくし、たくさんたくさん歩いていましたけど、どこまでも野の原が続いているだけでしたわ。たしかに、夢世は閉じてこるのがふつうでござりますよ。そうでなければ、他の夢と混じり合つてしましますからね。さあ、琵琶様。やつがれの背におつかまりください。

軽い琵琶様を乗せたやつがれは、今度こそ夢地を蹴りました。琵琶様のぶんだけ重たい身体で宙を駆けていきます。

眼下には、琵琶様の夢世が広がっておりました。桃色や薄緑の花々、薄青の小川がさらさら流れ、空には白霞がかかってあります。なんと美しい夢世でござりますよ。『』主人の夢世に勝るとも劣らぬ絶景でござりますね。

夢と夢を隔てる薄縄の帳を抜けました。途端、あたりの風景が変わつます。琵琶様の夢のよくな春の美しさはないものの、冬の静けさのように和いだ夢世でござりますね。

「主上よ…」

琵琶様がやつがれの背から身を乗り出しました。琵琶様のお声に気づいたように、直衣をまとった男性がやつがれたちを見上げられます。やつがれの脚が夢地に着きますと、背中の琵琶様は丸みのある楽器に戻つておられました。

「御藏の五絃琵琶だね」

直衣の男性がやつがれに近づき、琵琶様を抱き上げました。くゆる香りが琵琶様を包み込みます。

「『』は夢世。ならば、奏でても良いのかな」

もちろんでござりますとも。琵琶様もお望みでござります。ぱおるん、ぱおるん……。なんどもなんども弦をはじいて音を確かめた男性は、琵琶様を胸に抱え込み、撥を手を取りました。

ぱおろん、ぱおろおおん……ぱろん。

琵琶様の音が届いたそばから、夢世が変わります。春の野に雲雀が歌い、蝶も蜂も飛び交います。野兎や小狐が現れ、拍子よく飛び遊んでおりました。

その様子をやつがれは、そつと直衣の男性から離れます。琵琶様の音色に背中をおされ、やつがれはゆっくりと空へと駆け上がりました。夢の小鳥たちがやつがれのまわりを飛び交います。

琵琶様、またいつか、やつがれのご主人にもその音色をお聞かせください。

そうだ、ご主人。たまには青琵琶に演奏でもしてもらいませんか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5997y/>

---

春の夢庭にて

2011年11月18日03時19分発行